

諺から見た日本人と酒

シム・ポーリン

はじめに

日本の「酒飲みの文化」は根強い。多くの日本人にとって酒は欠かせない物の一つである。酒を飲む機会も多いし、飲む量もなかなか多い。やはり、酒は日本文化の重要な一要素である。酒についての諺はずっと昔から数多く生まれ、数えられない程ある。私はこの研修を、日本の様々の酒についての諺からこの文化をもっと深く知る為に、行ってきた。諺は日本人の内面世界を理解するのに、特に役に立つからである。それでは、諺から見た日本人と酒の関係について、英語や中国語の諺と比較しながら、レポートする。

社会の潤滑油

「酒なくて何の己が桜かな」。桜で有名な日本の諺である。

春が来ると桜の花が咲く。そして、日本人はお弁当を持って桜の花が一杯咲いている所まで行き、お弁当を食べ、酒を飲みながら、お花見をする習慣がある。何故桜という花が特に好まれるのかというと、それは無常感の為だと考えられている。桜の花は短い間しか咲いていないから、人生と同様にすぐ過ぎ去り、はかないものである。それ故に、桜が日本人の好みにぴったり来るというのである。

しかし、「酒なくて何の己が桜かな」という諺を考えると、酒がなければ桜がないというのだから、日本人の酒に対する気持ちがよく分かるというものである。「一升は夢のうち」と「酒は天の美祿」という諺もある。これは最大の賛辞である。酒飲みの楽しみについて、一升の酒が一生の栄華に比喻されている。酒を飲み、高歌放吟し、羽目を外すのは如何ばかりであるか。ここは酒の魅力がある。日本人は人間の酒を求める心によって神の心を推ることさえある。これは「お神酒上らぬ神は無い」という諺のことである。同じように上戸が自分勝手に思い込んでいる諺は「下戸と鬼はない」と「下戸と化け物はないもの」である。

やはり日本人は酒の愛好家である。酒の味は日本人の体質と日本の社会風土に深く染み込んでいると誰かがどこかに書いている。酒に対する日本人の強い執着は「お情より樽の酒」にも表わされる。「食い外れはするとも飲み外れはせぬもの」という諺からこの愛好の程がよく見える。酒を飲む機会があれば、ちゃっかり逃がさないという意味である。

酒の魅力は一体どこにあるだろうか。

「酒に十の徳あり」と言われる。先ず、社会的に酒は社会の人間関係の大切な潤滑油の一つだと言える。日本では、酒は独り飲むものではない。飲み会、即ち会社の人達でも一緒にどこかに行って飲んだり話したりすることは、今日の日本の社会文化では欠くことの出来ない習慣である。

その要点は酔うことである。何故かと言うと、普段、日本人にとって、本当の気持ちや考えをはっきりと言うことは難しいので、本音と全く違う建前を言う場合が多い。しかし、建前より本音の方が大切だろう。そして、酔うと、本音を言い易くなり、口に出てしまうのである。

だから、「真は酒にある」と言う。同じ意味で英語は "There is truth and wine" と言う。酔っていないと、言うことに気を付けている。隠したいことはちゃんと隠す。しかし、酔うと、全てのこと、特に本当のことを言う可能性が高い。「酔った口は正直」、「酔う手本性を表す」、「酒飲み本性違わず」、「酒が沈むと言葉が浮かぶ」とも言う。英語で "Drunkards and fools cannot lie" と "What soberness conceals, drunkenness reveals" というのがある。前者は酒酔いと馬鹿は嘘を言えないという意だし、後者は覚めている時に隠していることを酔いが漏らすということである。ラテン語でも "In vino veritas" と言う。この後者と同じ意味である。酔えば本当のことを言うようになるという意である。酒を飲むと、つい本性が現れるという意である。同じ意味で「酒後吐真言」と言う中国語の諺と "When the wine is in, the wit is out" と "When wine sinks, words swim", "Ale will make a cat speak" の英語の諺がある。

しかし、皮肉にも、日本では、酒の席での不謹慎は大目に見られがちである。そして、その理由は本心ではなく、酒が言わせたからである。その後で、言った覚えがないで済まされる。だから、酒の所為でつい言い過ぎても相手はあまり怒らない。それは皮肉ではなからうか。真と言いながら、他方で、当てにならない酒話と言う。

実際は、酒はこの意味で役に立つけれども、「酒入れば舌出す」。口数が多くなれば、失言することもあるの意である。理性で守ってきた秘密をつい漏らしてしまうということである。だから、「酔いて狂言、醒めて後悔」と言う。英語も "Drunkenness does not produce faults, it discovers them" と言う。酔うことは欠点を産むのではなく、只欠点を発見するだけであるという意である。

日本では、「忘年会」、「新年会」などの飲む機会が多い。酒量が男らしさやたくましさを表すと見られがちである。男が酔うと付き合いが良い、酒を飲まないと付き合いが悪いと見られる傾向がある。但し、最近の若者は機会があっても付き合いが減っている。男は時々深酒をし、酔ってしまう。シンガポールの場合は逆である。酔うことは軽蔑の目で見られ、人にあまりよく思われない。酒乱になる可能性があり、路上や車内で下呂を吐いたりする悪いイメージは別として、家に帰って妻を殴るといった例がある。酒を飲むと、場違いに陽気になったり、泣いたり、怒ったり、暴れたり、好色になったりする。これだ

ければ、酒は賭けごとなどと同様に悪とされるのも無理はない。英語の "Drinking water neither makes a man sick, nor in debt, nor his wife a widow" という諺を見れば、このことは理解出来る。只の水は人を病気にしたり、借金をさせたり、妻を未亡人にならせたりしないという意である。その上、シンガポールでは法律で飲酒犯罪というのがある。交通事故で、もし運転手が当時飲酒運転をしていたのが分かれば、罪は相当重くなる。

これと対照的に、日本では酒の上での言葉は失言とは認められず、交通違反を例外として、大目に見る傾向さえある。酔いの言うことは当てにならない。酒の上でへまなことをした時に、酔いを言い訳として用いたりもする。

百薬の長

酒は潤滑油である他に、薬だとも言われる。沢山の薬があり、その中で最も効目があるのは酒であると言われる。「酒は百薬の長」というのがそれである。先ず、「酒は愁を掃ふ玉ははぎ」と言う。酒は憂いを一掃きに払い去ってくれるような素晴らしい帚のようなものである。確かに、酒は憂いを忘れる為のものである。同じ意味で、英語にも "Drowning your sorrows" の言い方があるし、中国語にも「一醉解千愁」という諺がある。どちらも酒により、憂いを一時的に忘れられるということである。酒で一切を忘れてたくて酔うまで止めない。

ところが、中国の方は「酒入愁腸」や「借酒消愁愁更愁」とも言う。酒を通じて煩惱を捨てるつもりなのに捨てられなく、逆に増加するようになるという意である。日本と違うけれども、この差は簡単に解釈出来るだろう。前者は多分酔うまでのことを言っている。后者は酔いが覚めてからのことを言っている。飲む前より苦しみが大きいことを示している。

そして、酒は心だけの薬ではなく、体の薬にもなる。次のような諺がある。

「酒飲み上手は長生き上手人間」

「酒三杯は身の薬」

「酒は生命の水」

日本は世界第一の長寿国である。そして、超長寿者の中では酒が長寿の秘訣と言う人も相当あり、酒を楽しんでいる人が多いそうである。"There are more old drunkards than old doctors" という老人の医者より老人の酒飲みの方が多いの意の英語の諺もある。そして "A good drink makes the old young" 。酒は老いを若がえらせるという意である。酒でストレスも解くことが出来るし、脳や筋肉の緊張や疲労なども癒されると言われる。これは本当かどうか確かではないけれども、医学的に少量の酒は血管や神経も広げるし、消化や血液循環も促進するし、細胞の新陳代謝も促すし等々、... 多分それで、体全体がリ

ラックスするし、気持ちが楽になる。それに、悪玉コレステロールが減ったり、動脈硬化の予防になったりするるのである。

「程良い酒は長生きの元」の中は何か真があるかもしれない。それにしても、適度の飲酒が寿命を延ばすことはあっても、現実ではこの為を酒を飲んできた人は殆どいないだろう。そして、「酒飲み上手は、長生き上手」とは言うが、酒飲み上手（適度に飲めること）ということはなかなか難しくなかつたろうか。本当は、酒は薬になる時はそんなにないであらう。

百毒の長

他方では、今日の日本社会を見ればもう一種の現象が観察出来る。それはストレス過多である。酒を飲み過ぎて心身を蝕まれるアルコール中毒になる。医学で言うアルコール依存症患者は年々増え続けているそうである。糖尿病や肝硬変と飲酒との相関関係なども無視出来ないであらう。“He who is master of his thirst is master of his health”という英語の諺は、酒を適度に飲める人は健康も上手に維持出来るという意である。

上戸が酒の魅力を唱える一方、下戸の声で反撃している諺も確かに少なくない。「酔うに十の損あり」のような酒の害を教える諺も少なくない。

「酒は諸悪の基」

「酒は気違ひ水」

「酒は酒を飲む」

「酒が酒を呼ぶ」

「酒、人を飲む」

「酒極めて乱となる」

などがある。“Bacchus has drowned more men than Neptune”という英語の諺もある。ネプチューン（海の神）よりバッカス（酒の神）の方が多くの人を溺れさせてきた。

「酒が言はする悪口雑言」と言えば、過度に飲酒すれば、理性を麻痺させ、自制力を失わせることである。人は狂人と同様になり、他人も自分も傷つけることが多くなかつたろうか。

シンガポールの深夜の交通事故は殆ど酒の所為である。だから、シンガポール人は酒を飲むのは良く思わない。酔うまで飲む人が日本と比べると、本当に少ない。帰りは自分で運転しなければならない人は特に気を付ける。危ないからである。この意味で、シンガポールでの酒の飲み方は日本と比べると、おとなしいと言える。無論、大酒飲みがいないとは言えないけれども。

日本でも酒が深刻な害毒になってきた。飲酒運転で発生した悲惨な交通事故は別として、最近では息子が飲酒の父親を殺害した悲劇もあった。

ここで、シンガポール人のおとなしい酒の飲み方から連想されることがある。それは中

国の「酒逢知己千杯少」という諺である。馬が会う仲間と一緒にいれば、とても飲みたくて千杯も足りないという意である。中国人はこの諺から見ると味わう為に飲むようである。一方、考えてみると日本人は酔う為に飲むようである。酒は口の中ではあまり味がしない。味は喉にあると、日本人が言った。だから、日本人は味わう為に飲むより、むしろ酔う為に飲む方が近いだらう。あるフランス人の友達は日本人はがぶがぶと飲むのが速いと言った。彼らフランス人はグラス一杯のワインでもちびちび一時間もかけられる。ちびちび飲むことは酒飲みの楽しみであると言われる。けれども、日本人にとって酒は飲み物というより興奮剤ではなからうか。

「葷酒の山門に入るを許さず」と言う諺が昔から禅寺の古い石柱に記してある。酒は坊主の修行を防げるから、外部から持ち入るのが禁止していた。この諺から見れば、葷も酒も浄念を乱すのである。酒を飲むと、邪念が生まれる。

酒飲みの不経済

又、酒代についての諺もある。酒代の為なら何でも犠牲にする。それで、酒は大きな消費になる。これについて、以下の諺がある。

「酒と朝寝は貧乏の近道」

「酒は諸道の防げ」

「酒飲みは半人足」

「食酒は貧乏の花盛り」

酒を飲むと、一人前の仕事も出来ない。又、食事をしている時に飲む習慣を続ければ、貧乏から抜け出せないと主張している諺である。これと反対する声はまだないようで、不経済であることについては万人が異口同音のようである。酒の為に財を失って身を滅ぼした例はシンガポールではいくつでもある。英語で "Wine and wenches empty men's purses" という諺は酒飲みと若い女は人の財布を空にするという意である。

これに対して、上戸は「下戸の立てたる倉はなし」と異議を唱える。酒が飲めなくても金持ちになった例がない。それに、下戸は上戸が酒代を費すことを非難するけれども、禁酒したからといって、力と金が溜まるわけでもない。「下戸は倉でも立てたか」とは、これが出来ないことを笑うのである。

酒への警戒

当然酔いから覚めた後で後悔することも多い。この為、度を過ぎた飲酒の害を戒める諺が次のいくつある。

「酒は飲め、酒に飲まれるな」

「酒と女と博打には錠おろせ」

「酒との縁を絶つべきこと」

「浮世は色と酒」

「世の中に酒と女は仇なり」

「淫酒の二つは一時の快意に百年の定命を縮めるなり」

「酒の終わりは色話」

など酒と色に厳しい戒めがある。とはいえ、この世は「色」と「酒」に満ちているとよく言われ、色と酒が好きではない人は少ないはずである。「色」と「酒」は世の風情として欠かせないものだと思っている人も少ない筈であろう。だから、「欲と色と酒とを敵とすべし」というような諺がある。酒と女でしくじることが多い現実を通じて自戒を教えている。英語の "Eat at pleasure, drink by measure" は自由に食べ適度に飲めという意である。

そして、酒をいくら飲んでも理性を失うことはないということは本当はない。「酒は飲むとも飲まるな」、出来れば良いのに。この意味は、「酒飲み本性違わず」という諺が示している。

葉か毒か

一体酒は葉か毒か、これは簡単に言えない。実際は「上戸は毒を知らず下戸は葉を知らず」が一番冷静な客観的な見方だろう。そして、「酔覚めの水の味下戸知らず」。下戸はこの素晴らしい味を味わえない意である。即ち、上戸はつい害を忘れ深酒する。下戸は酒のメリットを実感出来なくて惜しい。「小半酒一升」。小半は約二合五である。小半を一升だと思いながら飲めば、これぐらいが限度とすれば良いという意である。

矛盾を指摘するのは「酒は飲むべし飲むべからず」。そして、「酒は飲むとも飲まるな」。酒は良い所も悪い所もあるのが分かる。これが分かって気を付ければ、被害はないかもしれない。

次のロシアの諺は正に的を得ている。「一杯は健康のため、二杯目は楽しみのため、三杯目は喧嘩になる」という諺である。英語も "The first glass for thirst, the second for nourishment, the third for pleasure, and the fourth for madness" と "The vine brings forth three grapes; the first of pleasure, the second of drunkenness, the third of sorrow" という諺がある。実は問題のは量ではなかろうか。日本でも同じ意味の諺の「一杯は人酒を飲み、二杯は酒酒を飲み、三杯は酒人を飲み」がある。

実は全ての葉は毒ではなかろうか。そう言えるかもしれない。本当に酒が好きな人は酒三杯では多分満足しない。そして、もっと飲みたければ、酒依存症に陥ってしまうのが普通であろう。だから、「酒三杯は身の葉」はそうであるけれども、葉の飲み過ぎは、中毒

になる。難しいのは適度の飲酒なのである。これは「酒は飲むべし、大いに飲むべし」という諺がある訳なのであろう。確かに、酒は飲むもので飲まれるものではない。しかし、飲まれる日本人が多いようである。「海より酒で溺れる人の方が多い」である。

終わり

この研修では、日本の諺から酒について考えた。一番明らかなのは、日本人は特に酒の身体に対する影響に関心を持っているということである。日本人は酒を薬或は毒として考え、興奮剤として飲むのが分かった。どちらについても諺が沢山ある。英語よりも中国語よりも多い。そして、酒のもう一つの役割は社会的な潤滑油である。この点は理解出来るような気がする。酒の良さも悪さも日本語の諺が多く言っているにもかかわらず、全体にこの諺を見れば酒に対する日本人の心や気持ちがよく分かる。日本人としては、酒は身体よりもむしろ社会の人間関係に良いという結論である。

参考文献

- 1 『比較生活文化辞典4』、金山宣夫、1983、大修館書店
- 2 『日本の諺』、金子武、1983、海燕書房
- 3 『現代諺辞典』、外山滋比古、1995、ライオン社
- 4 『酒』、永山久夫・川嶋宏、1988、オンタイム出版